

当館収蔵品にみる  
加藤友太郎とその製陶活動について

岡本  
隆志

2026年3月  
皇居三の丸尚蔵館

# 研究ノート——当館収蔵品にみる加藤友太郎とその製陶活動について

岡本 隆志

加藤友太郎（初代陶壽・嘉永四年（一八五二）〜大正五年（一九一六））は、明治期から大正期にかけて国内外の博覧会において高い評価を受けた製陶家である。吹絵による濃淡のグラデーションが美しい染付やその他の釉下彩（素地の上に図様をほどこして釉掛けの後、焼成する加飾技法）による写実的で繊細な絵付け、「陶壽紅」と称した磁器用釉下彩の赤色顔料の開発など、近代以降に発展した新しい技法によるすぐれた作品を遺した。現在、当館には加藤友太郎が製作したと判明する作品が四件収蔵されている。本稿ではこれらの収蔵品を紹介するとともに、これまで詳細に顧みられることのなかった加藤友太郎の製陶活動にふれて、最後に皇室との関わりについても考察する。

## 【収蔵品の紹介】

まず、当館が収蔵する加藤友太郎（以下、友太郎と略す）の作品を製作年代順にみていく。四件の作品のうち一件が明治三十年代、他の三件は友太郎の晩年に当たる大正期に製作された。いずれの作品も展覧会に発表された年や皇室に納められた時期が明らかだが特徴である。これまで公的機関が収蔵する友太郎の作品の数はかぎられていたが、近年、国立国会図書館のデジタルコレクションの拡充や個人蔵の作品が紹介されたことにより、友太郎の作域を具体的に知ることができるよう状況になりつつある（註1）。しかし、公的機関に所蔵されるわずかな作例以外は、多くの作品がいつ頃に製作されたのか明確ではない。この点において、当館収蔵品は製作年代を推定する際の基準作例になり得るものである。なかでも明治三十年代に製作された《玉蜀黍図花瓶》は、わが国の近代陶磁史を代表する作例としてこれまでにまたたび紹介されており、ここでは同時代の文献にふれつつ詳述する。



図1 加藤友太郎《玉蜀黍図花瓶》  
明治34年（1901）当館収蔵

①SZK000447 《玉蜀黍図花瓶》一点（図1、2、3）

製作年 明治三十四年（一九〇一）

法量（cm） 高四八・七 口径一八・七 胴径三一・八 高台径一七・三

銘 染付（方形内に）友玉園陶壽製

伝来 明治三十四年（一九〇一）の第一回全国窯業品共進会にて宮内省買上。

箱書（蓋表紙貼墨書）「青華彫刻玉蜀黍圖花瓶」、（蓋表紙貼）①「等級・丙下

品目・花瓶 番號・第一二號 大正十三年八月調 侍従職、②「宮内

庁物品標示票（記載内容省略）」

箱書（蓋裏墨書）なし

付属品 紫檀台一点

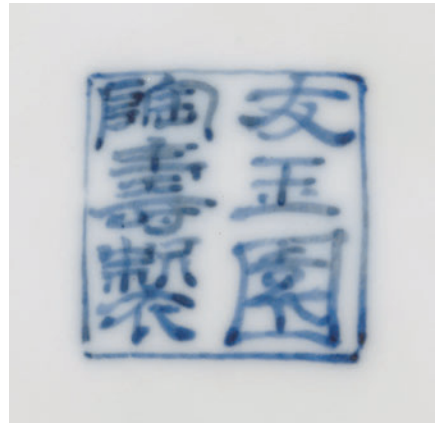


図2 《玉蜀黍図花瓶》 銘

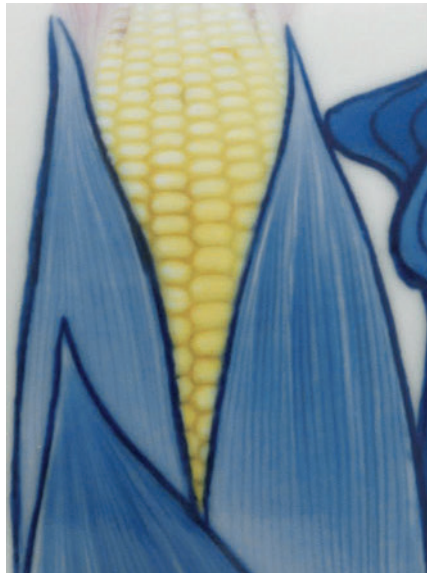


図3 《玉蜀黍図花瓶》 部分

本作品は明治三十四年（一九〇一）に開催された第一回全国窯業品共進会において、第一類「裝飾を主とする陶磁製品」に出品され、最高賞である一等賞金牌を受賞した。本作品は同年九月二十六日に会場へ差遣された東園基愛侍従によって宮内省御用品に選定された（註2）。それに先立つ同年九月二十二日に行われた褒賞贈与式では、最高位の受賞者である友太郎が出品人総代として答辞を述べた（註3）。

本共進会での最高位受賞は友太郎の履歴の中でも重要な事績で、同時代の文

献資料からうかがえる作品評価の点でも、本作品が友太郎の作歴の中で最も高い評価を得たと言っても過言ではない。受賞の理由として注目されるのは、褒賞贈与式の際に審査総長を務めた男爵金子堅太郎の稟請にみられる「東京府は従来美術の應用を試みたるもの多かりしも其結果猶ほ不充分的の憾を免れざりしが今回の出品は稍進歩して其一二は殆ど成功に達したるものあり」という文言である。これまでの東京府で製作された陶磁作品は「美術の應用を試みたるもの」が「不充分」であったが、本共進会の出品の中でそれにほぼ成功した作品が友太郎の《玉蜀黍図花瓶》であったというわけである。では、その「美術の應用」とは具体的に何を意味しているのだろうか。第一類「裝飾を主とする陶磁製品」の審査主任を務めた前田香雪は、審査報告のなかで東京府の出品者の第一として井上治兵衛とともに友太郎の名前を挙げ、本作品を次のように評した（註4）。

其二是彫刻青華磁玉蜀黍圖の大花瓶なり 圖樣剛勁にして彫刻も亦巧みに稜角を設けず用刀隱優にして充分雅趣を保たしめたり 太き茎廣き葉熟したる實尋ぬる蝶皆眞様を失はざるも寫生一遍に傾かずして畫の範圍を超脱せざるは筆者の用意を見るに足る 全体の形状に於ても亦間然する處なく釉色玲瓏些の窮状なきものは全く火度宜しきを得たる研磨の結果にして焼成の巧妙熟達を表明して餘りありといふべし

香雪が本作品の優れた点として挙げた箇所は以下の三点に要約される。

- 一、彫刻は鋭利ではなく微妙な凹凸をほどこし雅趣がある
- 二、トウモロコシや虫の絵付けは、創意を加えながら単なる写生に留まらない 絵画的な趣を残している
- 三、非の打ちどころのない器形とともに、美しく輝く釉色から焼成技術が極めて優れている点がかがえる

各要素から作品の細部をみていくと、まず彫刻は色付けされているために目立たないが、釉下彩の黄色で着色されたトウモロコシの実の部分は一粒ずつ立体的に薄い陽刻がほどこされている（図3）。また、実を包む皮にも極細の浅

い線刻がほどこされており、それに沿って染付で線描きされている。葉の表面がめくれている箇所では磁土を盛り上げて、その様子を立体的に表す。いずれの箇所も指で触れてわずかに感じとられる程度であるが、じつは絵付けされたすべての部分に盛り上げが行われている。器形の外觀を損なわない程度のごくわずかな彫刻が本作品の特徴となっている。この特異な技法は、友太郎が明治三十三年（一九〇〇）に開発した平面耐広象嵌法（資料1参照）を用いた可能性が考えられる。絵付けは染付だけでなく、すべてが釉下彩で描かれている。

花瓶全体に図様を配するように、花瓶の裾で一カ所にまとめられた三本の茎が胴から肩に向かって葉や実をつけながら広がっていく。染付は葉の表裏で濃淡やグラデーションの変化をほどこす一方、葉脈や輪郭の曲線は太く濃色の線を引き、大胆に目立たせている。それに対して、釉下彩による赤紫色の細い線描を重ねたトウモロコシのひげや、トンボは繊細な筆致で写実的に描かれている。トウモロコシの実やトンボの体色の黄色は、明治二十九年（一八九六）に飛鳥井孝太郎が開発したことにより「飛鳥井黄」と呼ばれた、フェルグソナイト鉱石が呈色剤として使用されている（註5）。このような図様配置と描法における粗密の両方をそなえた絵付けは、たしかにそれまでの日本陶磁にはない表現であった。焼成については、精練された素地の白さ、微妙な濃淡のある染付や釉下彩の色調を鮮やかにみせる釉葉の透明度の高さが挙げられる。これらのすぐれた特徴が一つの作品の中に凝縮されている点で、本作品は群を抜いていたのであろう。

友太郎は、本共進会の前年の一九〇〇年に開催されたパリ万国博覧会にも出品しており、銀牌を受賞している。写真資料からうかがえる同博覧会に出品された日本陶磁の多くは、器形は本作品とは異なり、本作品より狭い口縁と短い頸部あるいは細長い鶴首として、張り出した肩から裾までを窄まりの少ない形状としたものであった（註6）。また、絵付けは写実的な植物図様であるが、縦長の器形に合わせて垂直方向に描かれており、平板な印象を与える。それに比べると、本作品ではトウモロコシの茎は斜め方向に伸びており、葉は張り出した胴部を広く用いて横方向に配されている。葉の描写は、緩やかな曲線を描きながら前後に重なり合って空間的な奥行きを生み出し、染付の濃淡も相まって

図様自体にも動的な工夫が凝らされている。アール・ヌーボー様式の全盛期を迎えた一九〇〇年パリ万博では、日本陶磁に対するフランス側の評価は低調であったと言われているが、それを受けた新たな試みとして、前述した特徴を示す友太郎の本作品は高く評価されたのである。

②SZK000448 《青磁雲龍透彫花瓶》 一点（図4、5、6、7、8）  
製作年 大正二年（一九一三）

法量（cm） 高二六・五 奥行一三・〇 幅一三・〇

銘 染付（方形内に）友玉園陶壽製

伝来 大正二年（一九一三）十一月、日本美術協会第五十一回美術展覧会にて  
宮内省買上。

箱書（蓋表墨書）「青磁雲龍透彫花瓶」、（蓋表紙貼）①「丙下 花瓶 第三三

號 大正十三年八月調 侍従職」、②「丙下 一二二」

箱書（蓋裏墨書）「友玉園陶壽製（白文方印「陶壽」）」、（蓋裏紙貼墨書）「大正二年十一月 日本美術協會御用品」



図4 加藤友太郎《青磁雲龍透彫花瓶》  
大正2年（1913） 当館収蔵



図5 《青磁雲龍透彫花瓶》 銘



図6 出品札

付属品 包装（友玉園陶壽（朱文変形印「陶壽」）の墨書あり）、紫檀台一点、金属製落とし一点、出品札一枚

本作品は大正二年（一九一三）の日本美術協会第五十一回美術展覧会に出品され、宮内省買上となった。現存が確認されている友太郎の作品のなかでは珍しい青磁であるだけでなく、四方形の器形に四側面に透かし彫りをほどこしている点でも類例がない。透かし彫りは青海波風の雲形で、各面の周囲の枠を残して全体にほどこされている。主題となるのは作品名にある通り、雲形の透かし彫りを覆うように表された龍の姿で、花瓶の四側面を使つて配されている。龍は素地土を盛り上げて立体的に表されており、流れるような鬣の表現や一枚一枚を線刻で表した鱗など、巧みな彫塑の技術がうかがわれる。本作品にみられる稜線のある立体表現は、『玉蜀黍図花瓶』のわずかな膨らみによつて起伏をつけた陽刻とは異なり、東京美術学校に製作を委嘱されて明治三十八年（一九〇五）に完成した木製画帖形八曲小屏風《綵観》（東京藝術大学美術館所蔵）に収められた「金魚図磁板」の表現に近い（註7）。これは長崎県の三川内焼の置き上げの技法に通じるもので、三川内焼だけでなく三代清風與平、初代宮川香山、初代伊東陶山など、主に海外の博覧会に参加した製陶家が明治二十年代から三十年代にかけて盛んに採り入れていた（註8）。ただし、三川内焼の置き上げが陽刻となる凸部を彩色せずに素地と同じく白色のままとするのに対し、友太郎は凸部に

も色彩をほどこす点で違いがある。青磁釉は作品の表面にのみほどこされ、龍の瞳は釉下彩の黒色で着色されている。底裏は平底で白化粧がほどこされており、中央に染付銘がある。本作品は銘文の字形から製作年に疑義を呈されてきたが（註9）、後述するように宮内省の購入記録が確認されており、展覧会の出品札も現存する（図6）。それらによつて共箱の蓋表の紙貼墨書の通り（図8）、大正二年十一月に開催された日本美術協会の展覧会に出品されたものであることが裏付けられる（註10）。



図8 《青磁雲龍透彫花瓶》 蓋裏箱書



図7 《青磁雲龍透彫花瓶》 蓋表箱書



図9 《東京名勝図・萬歳楽図衝立》  
大正4年(1915) 当館収蔵

③SZK002519 《東京名勝図・萬歳楽図衝立》のうち「芝区芝浦」扇面形磁板  
一点(図9、10、11)  
製作年 大正四年(一九一五)  
法量(cm) 最大縦一六・五 最大幅三六・三 厚み〇・五(地板から浮き上がった部分を計測)  
銘 染付「(方形内に)陶壽」  
伝来 大正四年(一九一五)の大礼につき東京市より東京美術学校へ依頼製作。東京市より献上。  
箱書 なし

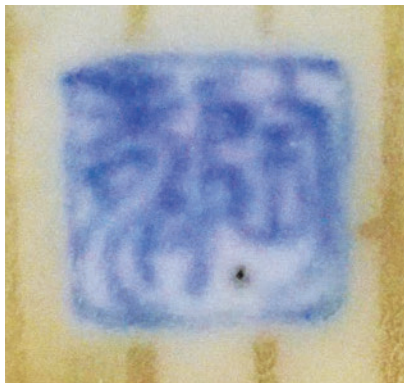


図11 《東京名勝図・萬歳楽図衝立》のうち「芝区芝浦」扇面形磁板 銘



図10 加藤友太郎《東京名勝図・萬歳楽図衝立》のうち「芝区芝浦」扇面形磁板

大正四年(一九一五)に行われた大正天皇の即位式を祝い、東京市から献上された木製衝立。製作は東京美術学校に委嘱され、東京市内十五区それぞれの名勝図を陶磁、漆工、金工、七宝、木彫、牙彫、木工など様々な素材の工芸技法によって表された扇面形にして木地に嵌め込み、中央には紙本に彩色された手書きの東京市の地図(縮尺二万分の一)が貼り込まれた(註11)。衝立の裏面には綴織地に小堀軯音による原画をもとに即位を祝う萬歳楽の演者が刺繍で表されている。友太郎は扇面形十五面のうち芝区芝浦を担当、扇面形は左側の上から三番目に貼り込まれた。下絵は東京藝術大学に現存しており、友太郎の銘である「陶壽」まで描き込まれている(註12)。扇面形製作には、陶磁の分野から友太郎のほか板谷波山が参加しており、波山は得意とする彫刻ではなく釉下彩だけで浅草観音堂を描いた。線描を用いて情景を細かく描写する友太郎に対して、波山は水彩画のような淡い色調でスケッチのように描いており、両者の画風には大きな相違がある。作品全

体の図案は図案家の島田佳矣が担当しているが、扇面形によっては島田ではなく作者自身が下絵を描いたとみられる。友太郎の工房は専門の絵付師を抱えていたので、本作品では下絵の段階から染付や釉下彩の特性を理解する絵付師が描いた可能性が高い。

本作品では扇面形の磁板に芝浦から東京湾を望む景色が染付と釉下彩によって表されている。手前の竹垣と松越しに望む春の海には染付の淡いグラデーシオンが用いられている。画面左下には釉下彩の黒色で横浜方面へ向かう蒸気機関車、右上の海上には三つの台場、蒸気船が配されている。上方には友太郎が陶壽紅と名付けた釉下彩の朱色で濃淡をつけた太陽が表されている。満開の桜はピンク色、竹垣や台場の芝は黄緑色、右下の霞は黄土色の釉下彩、海上に浮かぶ船の帆、鳥、桜花の一部は、白のイッチン盛りで表されている。松の描写では、薄い染付で松樹の形を塗りつぶした上から濃い染付で樹皮や葉、釉下彩の黒色で蒸気機関車や船、台場を細かく描いており、あらかじめ図様の構図を決めて計画通りに絵付けを進めていったものと思われる。

器物ではない平面の磁板は友太郎の作品のなかでは珍しく、他の作例としては前述した《綵観》のなかの「金魚図磁板」が紹介されたのみである。本作品が完成した翌年二月に友太郎は亡くなるが、春の穏やかな海景を通じて、友太郎の代名詞とも言えるべき陶壽紅、染付のグラデーシオン、釉下彩の細かな線描がすべて駆使されており、最晩年にいたってもなお自らが培った技術を作品のなかに発揮しようとしたことがうかがわれる。

④SZK006071 《青華竹林山水図花瓶》 一点(図12、13、14、15)

製作年 大正四年(一九一五)

法量(cm) 高四五・三 口径一四・八 胴径二五・七 高台径一四・五

銘 染付「(方形内に) 友玉園陶壽製」

伝来 大正四年(一九一五)に宮内省の依頼を受けて製作、納品。

箱書 (蓋表墨書)「青華竹林山水図花瓶」、(蓋表紙貼)①「花瓶 第三五八號

主殿寮 陶竹林山水」、②「階下 御座所」、③「物品標示票 (記載内

容省略)」

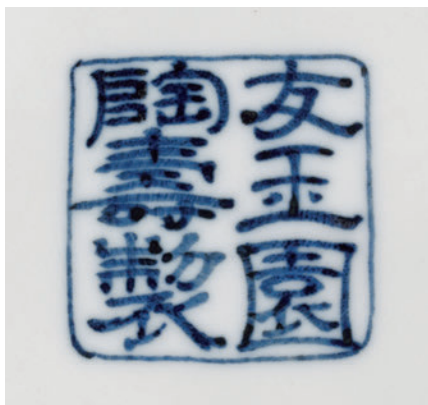


図13 《青華竹林山水図花瓶》 銘



図12 加藤友太郎《青華竹林山水図花瓶》  
大正4年(1915) 当館収蔵



図14 《青華竹林山水図花瓶》  
蓋表箱書

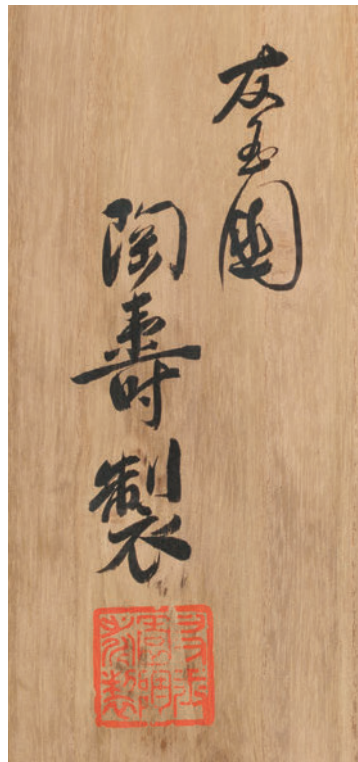


図15 《青華竹林山水図花瓶》  
蓋裏箱書

箱書 (蓋裏墨書) 「友玉園陶壽製 (朱文方印) 「友玉園陶壽製」)

本稿で初紹介となる作品。本作品は大正三年(一九一四)に竣工した武庫離宮の装飾品として製作された(註13)。宮内省の公文書によると、翌大正四年一月十三日付の会計書類に「武庫離宮へ備付品トシテ新調」とあり、一二〇円の金額が請求されている(註14)。この文書によって、本作品が《東京名勝図・萬歳楽図衝立のうち「芝区芝浦」扇面形磁板》と同じ大正四年(一九一五)に製作されたことがわかる。武庫離宮は皇室の別荘として、明治四十年

(一九〇七)に宮内省が西本願寺の門主大谷光瑞の月見山別邸と隣接する土地を買収して、翌年に起工となった。

器形は口縁から真つ直ぐに伸びる太い頸部、そこから肩にかけて張り出して胴裾に向かって窄まり、再び底部にかけてやや広がる。口縁は水平ではなく、上下になだらかな変形がみられる。また、皇室へ納入後、いつの時期か定かではないが大きく破損しており、頸部の付け根から肩にかけてと、胴部に線状の銀繕いがある。頸部が細く胴部の張り出しが大きい《玉蜀黍図花瓶》と比較すると全体の抑揚はやや控えめで、肩から胴裾までの器面全体を画面として染付で竹林山水図を描く。

雄大な景観描写を背景に、川岸に停めた小舟を降りて竹林のなかにある堂宇へと歩む高士と従者の童子が描かれる。絵付けはすべて染付で行われており、山中の湿潤な大気を感じさせる暈しをほどこしながら中景から遠景へ至る奥行きを表現している。本作品にみられる南画風の描写は、アール・ヌーボーの影響を言及される《玉蜀黍図花瓶》の画風とは全く異なる。友太郎の作品における画題の多様性や異なる画風の存在は、友太郎の工場である友玉園製陶所に各種の画題に適した絵付けをほどこすことができる複数名の絵付師が所属していたことを推測させる。それを証するように、友太郎の出品歴(資料2)を確認すると、明治二十年以降の展覧会出品作には山水図と思しき画題が幾度も選ばれていることが明らかになる。

明治二十六年(一八九三) 日本美術協会春季美術展覧会《磁製拂曉山林画

花瓶》

同年 シカゴ・コロンプス万国博覧会《Vase-Landscape》

明治二十八年(一九一五) 第四回内国勸業博覧会《磁製月夜山水花瓶》

明治二十九年(一九一六) 日本美術協会春季美術展覧会《磁製月夜雪景画

花瓶》

明治三十二年(一九一八) 日本美術協会春季美術展覧会《薄茶釉墨画山水

図香爐》

明治三十三年(一九〇〇) 日本美術協会春季美術展覧会《磁器墨画山水

花瓶》

同年 パリ万国博覧会《山水図花瓶》、《山水図細口花瓶》

瓶》

明治三十四年（一九〇一） 第一回全国窯業品共進会《薄茶釉墨画山水花瓶》

明治三十六年（一九〇三） 日本美術協会第三十三回美術展覧会《磁製墨画山水花瓶》

山水花瓶》

明治四十二年（一九〇九） 日本美術協会第四十四回美術展覧会《青華山水

大花瓶》

これらの作品名称から「薄茶釉」や釉下彩の黒色を用いた、水墨画風の表現を組み合わせた山水図様の作品が製作されたと推測される（註15）。最晩年に製作された本作品は、他の釉下彩技法を組み合わせず、すべての描写が染付だけでなされているのが特徴である。

### 【年譜及び出品歴からうかがえる友太郎の活動】

友太郎の活動に関しては、実業家渋沢栄一が事業に関与していたため、渋沢の関係資料をまとめた『渋沢栄一伝記資料』に収録される、「友玉園製陶所」の項に基本資料がまとめられている（註16）。また、友太郎没後の昭和十年（一九三五）に富山房より刊行された『陶器大辞典』において、陶磁研究者の塩田力蔵が「加藤友太郎」の項目を執筆している（註17）。筆者の塩田は生前の友太郎をよく知る人物であるが、辞典の記述内容の主要な典拠となったとみられるのは、昭和七年（一九三二）に相次いで発表された福井常静の二つの文章である（註18）。筆者の福井常静は、友太郎の養女で友太郎没後に二代陶壽となつた純子の実兄である。福井家は、友太郎が独立して友玉園を設立した際、常静と純子の父である福井常直から資金援助を受けたことを契機に、それ以降三代にわたって友玉園と関わりを持った（註19）。二代陶壽を継いだ加藤純子が昭和三年（一九二八）に死去した後、福井常静が三代陶壽を名乗った。しかし、いずれの資料も友太郎が東京に出てきた年や江戸川製陶所から独立した年などの重要な事項について齟齬がある。各資料の比較検討はまた別の機会に譲ることとし、以下では友太郎の製陶活動の概要をふりかえる。本稿巻末に友太

郎の年譜（資料1）と出品歴（資料2）を掲載した。ただし、出品歴は内国勸業博覧会、日本美術協会の出品を主に採録したもので、友太郎の全出品歴を網羅したものではない。

嘉永四年（一八五一）、瀬戸の窯元である加藤與八の次男として生まれた友太郎は、明治七年（一八七四）に東京へ出て（諸説あり）、同郷の川本富太郎の斡旋で初代井上良斎の陶房に入った。その後、明治八年（一八七五）に内務省勸業寮試験場の石膏型伝習生として、ゴットフリート・ワグネル、塩田眞、納富介次郎らの指導を受けた。翌九年（一八七六）九月、勸業寮試験場の石膏模型科第一期生として卒業、同年十月に瀬戸へ戻り石膏型の技術を広めようとしたものの、地元ではすぐに受け入れられず名古屋で普及を行った。その技術を見込まれて、愛知県の官費生として翌十年（一八七七）一月に再び上京し、試験場で研究を続けた。試験場は官制改革により内務省から工部省へ移管されたが、同年九月、試験場の機材や施設の一部を譲渡された塩田眞、納富介次郎によつて江戸川製陶所が設立されると、友太郎は職工として同所に所属した。明治十二年（一八七九）には友太郎は職工長となり、一切の製作の監督を任されるようになった。

明治十四年（一八八一）に開催された第二回内国勸業博覧会では、製陶所を経営していた塩田眞、納富介次郎の名義で七十六点の出品が行われた。同博覧会の第二区第二类焼窯製品の出品目録には製作分担の詳細が記載されている。友太郎はそのうち二十一点の製作に関与し、主に素地成形を担当、鈕の細工や螭龍形の筆架なども手掛けており、手捻りにも才を発揮したことがうかがわれる（註20）。同博覧会において江戸川製陶所は協賛賞牌一等を受賞した。

同博覧会が開催された明治十四年（一八八一）、友太郎は職工長を務めた江戸川製陶所から独立し、江戸川製陶所の隣接地に工場を設立した。この工場は後に農商務大輔であつた品川弥二郎により友玉園と名付けられる。その翌年、友太郎の工場内に農商務省地質調査所の資金補助を得てワグネルの設計による洋式新窯を築き、納富が設計した江戸川製陶所の旧式窯と燃焼効率などの比較実験を行った（註21）。この洋式新窯を一年後の明治十六年（一八八三）に払い下げを受け、友太郎の所有とする。友太郎はその後もワグネルが考案した吾妻

焼の素地製作や試験焼成に協力した。これらの試行期間を経て、ようやく友太郎の本格的な製陶活動が始まる。

翌十八年（一八八五）の繭織物陶漆器共進会では、友太郎は協賛賞牌一等を受賞し、高い評価を得た。この受賞は共進会で打ち出された方針に関係している。納富介次郎と塩田眞の提言により、美術的な工芸、実用性の高い工芸、日常使用を目的とする工芸の三段階に分けて製作することが求められた。その理由は、欧米の製陶事情を視察して一定の品質の製品を多量に生産する外国の工芸産業のあり方を目の当たりにした納富らが、それらに競合できるような国内窯業の方針転換を促したからであった（註22）。江戸川製陶所で納富、塩田らの薫陶を受けた友太郎は、その出品方針を忠実に実行に移した。それ以降、友太郎は内国勸業博覧会や国内の共進会といった、美術工芸以外の実用的な産業陶磁の出品がある場では、それぞれの分野に出品を行った。以下にみる通り、繭織物陶漆器共進会以降、それが友太郎の出品方針となる。

明治二十年（一八八七）に開催された東京府工芸品共進会では、受賞の有無は不明であるものの、友太郎は第一類飲食器、第二類家具及室内粧飾具、第五類教育及学術上ノ器具に出品した。美術的な評価がなされる第二類家具及室内粧飾具では、「加藤友太郎出品ノ平戸寫花瓶ハ染色形状共充分ノ製作ニシテ價モ亦相當ナルガ故ニ内外人ノ嗜好ニ適ス」と、その当時輸出品として海外でも人気のあつた平戸焼（現在の三川内焼）を写した作風が高い評価を得た（註23）。明治十年代からこの頃までの友太郎の作風が、平戸焼の特徴でもある染付を主体に細工物にもすぐれていたものであったことは特筆すべきであろう（註24）。

翌明治二十一年（一八八八）以降、日本美術協会の展覧会への出品が始まる。日本美術協会は、日本画及び伝統的な美術工芸の振興に力を入れた団体であり、友太郎も博覧会以外の場ではこの日本美術協会を中心に出品を行った。また、その前年の明治二十年（一八八七）に結成された東京彫工会の展覧会である彫刻競技会も、友太郎の主要な出品の場であった。

明治二十三年（一八九〇）の第三回内国勸業博覧会では、第一部工業で二等進歩賞、第二部美術では二等妙技賞を受賞した。第二部に出品した《菊水紋花

瓶》に対しては「通躰清雅ニシテ花紋優美ナリ」と審査報告にあり、単独で一等妙技賞を受賞した三代清風與平に次いで高い評価を受けた（註25）。次の明治二十八年（一八九五）の第四回内国勸業博覧会でも、工業と美術の双方に出品する方針は継続され、第一部工業では有功三等賞、第二部美術では妙技三等賞を受賞した。第二部美術に出品した《磁製月夜山水花瓶》、《磁製浪千鳥花瓶》に対しては、「二品皆純潔頗ル精巧ナリ 特二月夜山水ハ吹墨様ニ雲烟ヲ摸シテ筆意ヲ失ハス」と審査報告にあるように、「吹墨様二」すなわち吹絵による濃淡をつけた作品の絵付けの妙を評価されている（註26）。吹絵は近世に染付で用いられた吹墨技法を発展させたもので、エイログラフなど噴霧器を使用して柔らかなグラデーションを可能とし、他の追隨を許さない完成度の高さで、陶壽紅とともに友太郎の代表的な技法となった。

明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勸業博覧会では、第五部化学工業第二十二類陶磁器、第九部教育・学術・衛生及経済第五十類学術、第十部美術及美術工芸第五十八類美術工芸其一ノ四陶磁及七宝に出品した。その間の明治三十二年（一八九九）には友太郎の代名詞となる陶壽紅の発明を始め、前述した明治三十四年（一九〇一）の第一回全国窯業品共進会における最高位の受賞もあり、次のように審査報告でも高く評価されたが、第四回と同じくどちらも三等賞にとどまった（註27）。

加藤友太郎ノ出品ハ前回ニ比スルニ其ノ意匠及ヒ技術ニ於テ著シキ進歩ヲ現ハセリ 就中其ノ所謂陶壽紅ナルモノハ五年前全人ノ創製セシ出群ノ技ニシテ今回ノ出品亦巧ニ之ヲ應用セリ 其ノ他全人ノ青華及ヒ彫刻ハ皆鮮美ニ他ノ摸範トスルヲ得ヘシ

内国勸業博覧会における出品方針を継続したことにより、友太郎は鑑賞向けの美術陶磁だけでなく、実用的な産業陶磁の世界でも功績を残した。明治三十七年（一九〇四）から同三十八年における日露戦争の際、外地の不衛生な飲料水によって体調を崩す兵士が多かったため、友太郎は携帯可能な濾過器を発明し、「陶壽式濾過器」として称賛された（註28）。しかしながら、海外にお

ける博覧会では友太郎への高評は続くものの、国内での評価は陰りを見せ始める。その理由として、明治四十年（一九〇七）に友玉園製陶所を牛込区新小川町から荏原郡大崎町へ移転を計画したことが少なからず影響を及ぼしたとみられ、同年に開催された東京勸業博覧会の審査評語でも、それについて言及されている（註29）。

加藤友太郎、竹本阜一ノ出品ハ例ニ依リ一種優雅ノ美術工藝品タルヲ失ハサルモ較々變化ニ乏シキノ嫌ナキニ非サルカ如シ聞ク加藤友太郎ハ新式經營準備中ナリト宜シク來ル日本大博覧會ニ於テハ其精品ヲ出陳シ以テ大ニ其技能ヲ發揚スヘキナリ（傍点は引用者）

出品時の記載をみると、このときの住所はまだ牛込区新小川町となっており、東京勸業博覧会が開催された明治四十年（一九〇七）は新工場の建設途中であった。工場移転の慌ただしさのため、出品作はこれまでのように「優雅」さを湛えてはいたものの、「變化ニ乏シキ」作品となったのかもしれない。翌年になって移転が行われた新工場は、荏原郡大崎村居木橋（現在の東京都品川区大崎一丁目）に敷地千五百坪の敷地を得て、そこに約三百坪の工場の建物を建てた大規模なものであった。ところが、移転して直後の明治四十一年（一九〇八）九月三十日に目黒川の氾濫があり、工場は浸水被害を被った。この被災は新工場に賭けた友太郎の目論見を挫くこととなった上、友太郎自身も心臓病により健康を害したため、以前ほど精力的に製作に取り組むことができなくなったものとみられる。だが、出品歴を確認するかぎり、その後も明治四十三年（一九一〇）の日英博覧会などの海外の博覧会や日本美術協会の展覧会への出品を続けていた。その一方で、職人氣質の友太郎が大規模な工場を運営することは財政的にも困難となり、工場移転の際に支援を目的に結成された匿名組合の監督であった工学博士の高松豊吉が工場運営に助力したという（註30）。そして、大正五年（一九一六）二月二十七日、友太郎は六十六歳で永眠した（註31）。

#### 【加藤友太郎と皇室の関わり】

最後に友太郎と皇室の関わりを、年譜（資料1）と出品歴（資料2）とともに、宮内省による作品購入記録（資料3）をもとにみていくこととする。出品歴から確認できる最初の宮内省御用品は、明治二十八年（一八九五）の第四回内国勸業博覧会の出品作であるが、宮内省側の文書では明治十八年（一八八五）の繭絲織物陶漆器共進会において初めて買上げがあったことがわかる。それ以降、内国勸業博覧会のほか、日本美術協会、東京彫工会、東京勸業博覧会、東京大正博覧会など、たびたび買上げを受けていた。また、武庫離宮の室内装飾であった当館収蔵品の他にも、明治三十九年（一九〇六）以降、御用邸の装飾品を製作したことが明らかになった。

明治三十二年（一八九九）に友太郎は磁器用釉下彩の赤色顔料である陶壽紅を開発した。陶壽紅を用いて旭桜図を描いた花瓶を製作し、大日本窯業協会会頭の品川弥二郎を通じて皇后（昭憲皇太后）に献上した（註32）。それに先立つ明治三十一年（一八九八）の『実業之日本』に掲載された記事には、「近年しばしば宮内省より宮中御用品の調達を命ぜられ面目を施されし」とあり、この頃すでに宮内省から依頼を受けて作品を納入していたことが示唆される（註33）。これは展覧会における出品作品の買上げとは異なり、宮内省側から具体的な指示を受けて製作する特別注文品であったことを意味する。三代陶器を襲名した福井常静も「友玉園は公私の信用も厚く屢々宮内省御用をも承はり磁製食器類各種の大口御注文を完納したことは誠に光栄である」と述べており、宮内省側の記録をまだ確認できていないものの、磁器製食器の大口注文を受けていた可能性がある（註34）。

当館収蔵品の《玉蜀黍図花瓶》が出品された明治三十四年（一九〇一）の第一回全国窯業品共進会は、皇室との関わりにおいても友太郎の製陶家人生のなかでハイライトとなる機会であった。本共進会は大日本窯業協会の主催により同年九月一日から九月三十日にかけて、上野の日本美術協会列品館で開催された（註35）。出品分野は第一類 装飾ヲ主トセル陶磁製品、第二類 實用ヲ主トセル陶磁製品、第三類 七宝及瑠璃製品、第四類 玻璃製品、第五類 セメント・煉瓦・敷瓦・其他建築用品、第六類 意匠圖案及模型、と窯業分野全般にわ

たった。日本全国の窯業関係者の出品を一堂に集めた初の展覧会であった。天皇（明治天皇）から金三〇〇円、皇后（昭憲皇太后）から金二〇〇円、皇太子（大正天皇）から金五十円が下賜された。その他、参考室に陳列された御物《青磁浮牡丹花瓶》一对（当館収蔵品の法隆寺献納宝物）の貸下げや、皇后と皇太子による会場への行啓など、皇室による少くない支援が行われた。この国内窯業界を挙げて行われた共進会において、友太郎が出品した《玉蜀黍図花瓶》は、最高位となる一等賞金牌を佐賀県の香蘭合名会社とともに受賞する栄誉に浴した。そして、《玉蜀黍図花瓶》は明治天皇が差遣した東園基愛侍従により、皇后は行啓の際に《波上旭画花瓶》を自ら選定し、友太郎の出品した二作品が宮内省御用品となった。

皇后と皇太子の行啓は会期終盤の九月二十七日に実施され、会場内の御休憩所において余興として宮川香山と加藤友太郎の両名による御前製作が行われた。友太郎は、加藤亀太郎、飯塚千之助を助手として従え、以下の四種の製作を披露した。

（第一）西洋法により小花瓶・コップ 鑄込製造の事

（第二）日本製造法により煎茶々碗・急須・菓子鉢・德利・花瓶 轆轤手造りの事

（第三）第一の鑄込製品取出の事

（第四）煎茶々碗削り仕上の事

第二の余興で、友太郎が轆轤で花瓶を挽いた際、完成した花瓶の素地を白木の三宝に載せて審査総長の金子堅太郎が皇后の御前に差し上げたところ、皇后が指先で花瓶に触れた。指紋が残るほどの強さではなかったが、轆轤挽きのままの湿り気のある素地なのでほのかに指痕が残った。友太郎はその指痕だけを白く残して周囲に紫色の釉薬をほどこし、口縁から内側の内面にかけて共進会の会場である上野の桜ヶ岡に因んだ桜花文様を、陶壽紅を用いて散りばめて焼成した。そして、完成した花瓶に金子が箱書をしたため、再び皇后の上覧を経て加藤家の家宝となったという。この逸話は「皇后陛下御判手の花瓶」として

当時の新聞記事にもなり、共進会を主催した大日本窯業協会の『大日本窯業協会雑誌』には花瓶の挿図付きで紹介された（註36、図16）。この御判手の花瓶は、平成十六年（二〇〇四）に明治神宮文化館で開催された「昭憲皇太后九十年祭記念展 昭憲皇太后 美しき明治の皇后」に、《皇后陛下御指跡花瓶》（個人蔵）の名称で出品された（註37）。

【むすび】

明治三十四年（一九〇一）の第一回全国窯業品共進会の閉幕後、同年十月二十六日に行われた大日本窯業協会の講演会において、友太郎は次のような提言を行った。窯業界の発展のためには学者だけでなく、製造者も海外の進んだ技術や機械、現地の嗜好を実際には渡航して研究すべきで、国などの組織が窯業関係者を海外派遣する際は製造者もメンバーに加えるべきであると（註38）。長年にわたって実製作にたずさわった者ならではの視点である一方、洋行帰りの研究者や博覧会官僚らが指導する窯業界への批判を含んだ発言である。

友太郎は伝統的な窯業地である瀬戸から明治初期にいち早く東京へ向かい、ワグネルや納富ら殖産興業を推進する外国人化学者や技術官僚から最新の製陶技術や化学知識を吸収した、開明的で進取の気性に富んだ製陶家であった。美術的な陶磁作品だけでなく、実用的な産業陶磁にも力を注いだ製作のあり方は、同時代の製陶家のなかでも稀有な存在であったと言える。その点において、高い技量のみならず伝統的な美意識が重視された明治・大正期の帝室技芸員、三代清風與平、初代宮川香山、初代伊東陶山、初代諏訪蘇山とは製作スタイルを異にする。近世以前から続く京焼の伝統がある京都を基盤に活動した上記四名に対して、明治に入って新たに首都となった東京で西洋の近代化学の知識と科学技術を背景に製作した友太郎の存在は極めて対照的である。

本稿では先行研究を土台に出品歴や年譜を作成し、加藤友太郎の初期から晩年にいたる活動を捉えることを試みた。今後はさらに友太郎の作風の変遷を把握するべく、未紹介作品の確認、文献資料の収集を継続したい。

（おかもとたかし 当館学芸部企画課主任研究員）

註

- (1) 関和男「明治釉下彩二 初代加藤友太郎―器銘による製作年代の特定―」、創樹社美術出版、二〇二二年。
- (2) 『第一回全国窯業品共進會報告』、大日本窯業協会、一九〇二年、七十九、八十一頁。
- (3) 前掲註2、二十五、二十六頁。
- (4) 前掲註2、四十二頁。
- (5) 「飛鳥井黄」については次の文献を参照。立花昭「黄色釉下顔料の開発について―「飛鳥井黄」と欧州諸窯の状況―」、岐阜県博物館調査研究報告」第四十一号、岐阜県博物館、二〇二二年三月、一―六頁。
- (6) 星野錫編『第二臨時増刊 美術画報 巴里博覧會出品組合製作品』、画報社、一九〇〇年。
- (7) 横山りえ「東京美術学校委嘱製作《綵観》について」、『工芸の世紀―明治の置物から現代のアートまで』、東京藝術大学美術館、二〇〇三年、二二八―二六六頁。
- (8) 岡本隆志「明治期の陶磁作品に見られる陽刻技法の一種について」、『三の丸尚蔵館年報・紀要』第二十二号、宮内庁、三十四―四十三頁。
- (9) 関和男、前掲註1、二十二頁。
- (10) 『御用度録(宮廷) 八/大正二年』、識別番号六九四五五、宮内公文書館所蔵。
- (11) 本作品が当館で初めて公開されたのは次の展覧會である。宮内庁三の丸尚蔵館「祝美―大正期皇室御慶事の品々」、宮内庁、二〇〇七年、二十二―二十七頁。
- (12) 東京藝術大学美術館「芸大コレクション展 資料は繋ぐ―名作と下絵・連作」、芸大ミュージアムショップ/六文舎、二〇〇五年、二十七頁。下絵の寸法(cm)は、縦約一一・二 幅約三六・七と紹介されている。
- (13) 武庫離宮は現在の神戸市立須磨離宮公園内にかつて所在し、昭和二十年(一九四五)の空襲により焼失した。所在地の名を冠して須磨離宮と呼ばれるが、正式名称は武庫離宮。
- (14) 『御用度録十六 大正四年』、識別番号二一九五九一四、宮内公文書館所蔵。
- (15) 同じく山水図様の《色絵山水図花瓶》(東京藝術大学美術館所蔵)は、二〇〇四年に愛知県陶磁資料館で開催された展覧會「近代窯業の父 ゴットフリート・ワグネルと万国博覧會」に出品された際、製作年を「明治三十四年(一九〇一)頃」として紹介されている(同展図録、七十七頁)。この明治三十四年に開催された第一回全国窯業品共進會の出品作《薄茶釉墨画山水花瓶》の名称から想起される色調と画題は本作品と共通しており、同展で推定された製作年代は妥当であると考えられる。
- (16) 『渋沢栄一伝記資料』第十一卷、渋沢栄一伝記資料刊行会、一九五六年、四三一―四三九頁。
- (17) 塩田力蔵「加藤友太郎」、『陶器大辞典』卷二、富山房、一九三五年、一三四―一三八頁。
- (18) 福井常静「友玉園製陶所」、高松博士祝賀伝記刊行会編『工学博士高松豊吉伝』、化学工業時報社、一九三二年、三四九―三五三頁。福井常静「我國に於ける洋式窯の開祖友玉園加藤製陶所の起源」、『大日本窯業協会雑誌』第四七四号、一九三二年六月、三八一―三八三頁。
- (19) 伊藤かおり「近代陶磁を彩った人々 加藤友太郎」、『近代陶磁』第二号、近代国際陶磁研究会、二〇〇一年、十二頁。
- (20) 宮内庁書陵部図書寮文庫が所蔵する『(第二回) 内国勸業博覧會出品写真』(函架番号B八・一八六、枝番号〇〇〇一)に「二〇 花瓶(江戸川製陶所出品・加藤友太郎)」と記載された江戸川製陶所で友太郎が製作した花瓶の写真が収録されている。
- (21) 加藤友太郎、中澤岩太「〇陶器焼窯試験報告」、『理学協会雑誌』第四卷、理学協会事務所、一八八三年七月、三二〇―三二六頁。「〇陶器窯新設(農商務省報告)」、『官報』第十三号、一八八三年七月十六日、十―十一頁。
- (22) 花井久穂「美術」と「産業」のわかれ道―産地主義の芽生えとワグネルの「美術の要用」、『明治・大正時代の日本陶磁―産業と工芸美術』展図録、明治・大正時代の日本陶磁展実行委員会、二〇二二年、一七一頁。
- (23) 山崎染編『東京府工芸品共進會品評報告』、敬業書院、一八八七年、十八頁。
- (24) 東京藝術大学美術館が所蔵する《青花龍耳瓶》は「明治丙戌晩冬製 友玉園陶壽」の箱書があり、明治十九年(一八八六)に製作されたことが明らかな作品である。染付と龍耳の細工を組み合わせた複雑な器形で、勸業寮試験場で習得した石膏型を成形の際に使用したものとみられる。註20でふれた明治十四年(一八八一)の第二回内国勸業博覧會の出品作にみられる細工にも、その傾向を確認することができる。
- (25) 『第三回内国勸業博覧會審査報告 第二部』、第三回内国勸業博覧會事務局、一八九一年、一六〇頁。
- (26) 『第四回内国勸業博覧會審査報告 第二部』、第四回内国勸業博覧會事務局、一八九六年、一七三頁。
- (27) 藤江永孝「第二十二類 陶磁器 其一、二、三」、第五回内国勸業博覧會事務局編『第五回内国勸業博覧會審査報告 第五部 卷之四』、長谷川正直、一九〇四年、四頁。
- (28) 「▲陶壽式濾過器の發明」、『読売新聞』、一九〇五年七月二十八日朝刊。錦人「陶壽式濾過器 發明者 加藤友太郎氏」、『財界』第三卷第五号、一九〇五年八月、三十三、三十四頁。間水居主人「陶業界に於ける加藤陶壽氏の半面」、「実業世界」第三年第二十号、理財新報社、一九〇九年六月、三十頁。
- (29) 藤江永孝「第九部 第八十二類 陶磁器」、『東京勸業博覧會審査報告卷六』、東京府廳、一九〇八年、二九四頁。
- (30) 福井常静「友玉園製陶所」、前掲註18、三五二頁。

- (31) 「加藤友太郎氏逝く」、「読売新聞」、一九一六年三月一日朝刊。「加藤友太郎氏逝く」、「建築工芸叢誌」、第二期第十七冊、建築工芸協会、一九一六年三月、三十八頁。
- (32) 塩田力蔵、前掲註17、一三六頁。
- (33) 横井時冬「傳記逸聞 友玉園加藤陶壽氏の事蹟」、「実業之日本」第一卷第八号、実業之日本社、一八九八年一月、三十二頁。
- (34) 福井常静「友玉園製陶所」、前掲註18、三五二頁。
- (35) 前掲註2、一頁。以下、本文中の共進会に関する内容は本書に基づく。
- (36) 「●皇后陛下御判手の花瓶」、「読売新聞」、一九〇二年三月一日朝刊。「皇后陛下御指跡花瓶」、「大日本窯業協会雑誌」、第十一卷第一二六号、一九〇三年六月、二〇三頁(図16)。塩田力蔵、前掲註17、一三七頁。
- (37) 『昭憲皇太后九十年祭記念展 昭憲皇太后 美しき明治の皇后』、明治神宮、二〇〇四年、六十三頁。
- (38) 前掲註2、一〇四～一〇七頁。

図版出典

図10 筆者撮影

図16 <https://doi.org/10.2109/jcersj1892.11.126>\_Plate1



図16 加藤友太郎「皇后陛下御指跡花瓶」、  
『大日本窯業協会雑誌』、  
第11卷第126号、  
明治36年(1903)6月

謝辞

宮内省の購入記録に関する公文書調査では針生すぐり様にご協力いただきました。また服部文孝様より資料をご提供いただきました。ここにお名前を記して御礼申し上げます。

資料1 加藤友太郎(初代陶壽)年譜

和暦	西暦	事項
嘉永4年	1851	9月、瀬戸の窯元加藤與八の次男として生まれる。
明治7年	1874	24歳で東京へ上京し、瀬戸の同業者川本富太郎の斡旋で同郷出身の初代井上良斎の浅草橋場町の陶房に入る。
明治8年	1875	七宝会社社長村松彦七の世話により、7月に内山下町の博物館に設立された内務省勸業寮試験場の石膏型伝習生として、ゴットフリート・ワグネル、塩田眞、納富介次郎、川原忠次郎らの指導を受ける。
明治9年	1876	9月、勸業寮試験場の石膏模型科第1期生として卒業。10月、瀬戸に戻り、加藤五助や川本榊吉らに石膏型の技術を教えるが、失業を恐れた多数の轆轤工の反発に遭う。その後、名古屋の岡谷惣助のもとで西洋轆轤と石膏型を安場保和・愛知県令らに披露し、技術を伝えた。この頃、ワグネルの指導により、重クローム酸加里を粉にして硫黄華を加えて焼き上げ、青貝須を製する方法を授かる。
明治10年	1877	1月、官制改革により内務省勸業寮が廃止され、それらの事業を引き継いだ工部省工作局の小石川出張所に試験場が移転する。同月、名古屋で評価を高めた友太郎は、愛知県の官費生として上京し、2月まで再び試験場で研究を続ける。9月、塩田眞、納富介次郎によって、江戸川治いの東京市牛込区新小川町2丁目10番地に江戸川製陶所が設立される。友太郎は同所の職工となり、賞状を5度受ける。江戸川製陶所は塩田眞が所長、納富介次郎が技師長となった(明治17年に閉鎖)。以降、友太郎は2年間にわたり、納富が築いた和洋折衷窯について研究する。
明治12年	1879	3月、江戸川製陶所の職工長となる。12月、塩田眞より一切の監督を委任される。
明治14年	1881	7月、塩田眞の許しを得て江戸川製陶所を辞めて独立し、東京市牛込区新小川町2丁目8番地(江戸川製陶所の隣接地)に工場を設立する。
明治15年	1882	6月、農商務省地質調査所の資金により、ワグネルが設計した洋式新窯を友太郎の工場内に築造する。この洋式新窯で化学用坩堝及び試験皿等を試験焼成し、輸入品に匹敵する成果を得る。工場は農商務大輔・品川弥二郎によって友玉園と名付けられ、友太郎は平野勝の命銘によって陶壽と名乗った。
明治16年	1883	6月、ワグネル設計の洋式新窯が地質調査所より友太郎に払下げられる。ワグネルが考案した釉下彩陶器(吾妻焼)の試験焼成を依頼される。義弟の飯塚千之助を支配人として製陶一切を担当させる。
明治19年	1886	釉下彩の紫色顔料の研究を始める。
明治20年	1887	この頃から釉下彩に用いる赤色顔料を求めて、国内および欧米の鉱石を集めて研究する。
明治23年	1890	釉下彩の紫色顔料の開発に成功する。
明治26年	1893	釉下彩の黄色顔料の開発にほぼ成功するが、明治29年2月に「飛鳥井黄」が成功してから、岐阜県恵那郡苗木村産のフェルグソナイト鉱石を用いるようになる。
明治28年	1895	11月、井上治三郎、河原徳立、中島正而、白羽長次郎らと陶磁工業の発達隆盛と競争乱造・乱売を防ぐため、府下陶磁工業組合を設立する。
明治29年	1896	鉄鉱釉の試験標本の間に極少しばかり赤色を認める。
明治32年	1899	2月、釉下彩の赤色顔料の開発に成功する。同色を用いて旭桜図を花瓶に描き、大日本窯業協会会頭・品川弥二郎を通じて皇后(昭憲皇太后)へ献上された。この色を「陶壽紅」と名づける。5月、上野公園で開催された春季美術展覧会に出品した「旭日鳴鳥の図花瓶」に初めて陶壽紅を用いる。
明治33年	1900	平面耐広象嵌法(白象嵌によって磁器に波または羽毛などを表す技法)に成功する。
明治34年	1901	9月27日、第1回全国窯業品共進会に行啓した皇后が、友太郎が轆轤挽きした花瓶素地に触れる。花瓶はその指痕を残したまま焼成され、皇后御覧の後、「御判手の花瓶」として加藤家の家宝となる。
明治38年	1905	7月、陶壽式濾過器を発明する。
明治40年	1907	品川弥二郎の口添えで渋沢栄一らの支援を受けて、匿名組合友玉園製陶所を設立し、荏原郡大崎村居木橋に敷地1500坪に約300坪の工場を建設し、北村彌一郎設計の倒焰式堅窯のほか数個の補助窯を築造する。
明治41年	1908	荏原郡大崎村居木橋341番地の新工場に移転する。東京工業試験所の初代所長高山甚太郎、二代所長高松豊吉の協力を得て、新式の製陶機械を導入して、ガスや電気の動力を用いて事業を発展させようとしたところ、目黒川の水害に遭ったため、工場周囲に煉瓦壁をめぐらせる。
大正5年	1916	2月27日、66歳で病死。生前に受領した内外の名誉大賞21個、金銀賞37個、銅賞30個、銀盃22個、木盃その他名誉褒状は多数。友太郎の墓地は新宿区弁天町の宗参寺にある。

(註) 本年譜の作成に当たって、以下の資料を参照した。

- 加藤友太郎「○陶器焼成試験報告」、『理学協会雑誌』第4巻、理学協会事務所、1883年7月、320～326頁
- 「○府下陶磁工業組合の設立」、『読売新聞』、1895年11月13日朝刊
- 横井時冬「傳記逸聞 友玉園加藤陶壽氏の事蹟」、『実業之日本』第1巻第8号、実業之日本社、1898年1月、32頁
- 横井時冬『日本工業史 訂補三版』、吉川弘文館、1902年、278～284頁
- 「▲陶壽式濾過器の発明」、『読売新聞』、1905年7月28日朝刊
- 石井研堂「世界の発明者列伝中に入るべき本窯紅顔料の発見者加藤友太郎氏」、『実業少年』第5巻第5号、博文館、17～21頁
- 大日本窯業協会編『日本近世窯業史 第三編 陶磁器工業』、大日本窯業協会、1922年、1442～1452、1458～1460頁
- 植田豊橋編『ドクトル・ゴットフリート・ワグネル伝』、博覧会出版協会、1925年、24～25頁
- 福井常静「友玉園製陶所」、高松博士祝賀伝記刊行会編『工学博士高松豊吉伝』、化学工業時報社、1932年、349～353頁
- 福井常静「我國に於ける洋式窯の開祖友玉園加藤製陶所の起源」、『大日本窯業協会雑誌』40巻第474号、1932年6月、381～383頁
- 塩田力蔵「加藤友太郎」、『陶器大辞典』巻2、富山房、1935年、134～138頁
- 磯ヶ谷紫江「日暮里養福寺と梅翁花尊碑」、後苑荘、1938年、39、40頁
- 渋沢青淵記念財団竜門社編纂「第十節 陶器製造業 第三款 友玉園製陶所」、『渋沢栄一伝記資料』第11巻、渋沢栄一伝記資料刊行会、1956年、431～439頁
- 桂又三郎編『五品共進会陶器解説 上』、陶磁文献刊行会、1968年、72～73頁
- 長谷部満彦「加藤友太郎の陶技」、吉田耕三編『現代日本の陶芸』第1巻、講談社、1985年、129～131頁
- 鎌谷親善「明治初期における陶磁器業の近代化政策」、『化学史研究』35号、化学史学会、1986年、49～70頁
- 伊藤かおり「■近代陶磁を彩った人々 加藤友太郎」、『近代陶磁』第2号、近代国際陶磁研究会、2001年、12、13頁
- 荒川正明「加藤友太郎」、『角川日本陶磁大辞典』、角川書店、2002年、307、308頁
- 「年表」、展覧会図録『近代窯業の父 ゴットフリート・ワグネルと万国博覧会』、愛知県陶磁資料館、2004年、136～139頁
- 服部文学「釉下彩のパイオニア・加藤友太郎」、『小さな蕾』463号、創樹社美術出版、2007年、49～55頁
- 関和男「明治釉下彩 初代加藤友太郎一器銘による製作年代の特定」、創樹社美術出版、2022年

資料2 加藤友太郎出品歴 (旧字は適宜新字に改めた。■は判読不明の文字。)

和暦	西暦	博覧会名	出品者名義	出品者住所	出品作品名 (その他に出品番号、個数、出品区分、受賞、売価、分業製作の際の担当などを記載) ※1	出典
明治14年	1881	第二回内国勸業博覧会	塩田眞、納富介次郎	東京府新小川町二丁目	壺 (二) 陶 (第二区第二類、鈕細工を担当)	『第二回内国勸業博覧会出品目録 第二区』、内国勸業博覧会事務局、1881年
					花瓶 (七) 砂 (第二区第二類、獅子画を担当)	
					花瓶 (八) 砂 (第二区第二類、素地成形を担当)	
					花瓶 (一〇) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)	
					三具足 (一九) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)	
					香爐 (二二) 砂 (第二区第二類、海魚置上ケ、鈕を担当)	
					水鉢 (二四) 陶 (第二区第二類、唐草模様浮上ケ、素地成形を担当)	
					珈琲注子 (二五) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					茶注子 (二六) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					砂糖入 (二七) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					乳入 (二八) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					菓子鉢 (三二) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)	
					七寸皿 (三五) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					六寸皿 (三六) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当か)	
					盥鉢 (三九) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)	
水次 (四〇) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)						
楊子入 (四一) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)						
石罅入 (四二) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)						
嗽水入 (四三) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)						
尿器 (四四) 磁 (第二区第二類、素地成形を担当)						
筆架 (五四) 磁 (第二区第二類、手捻螭を担当)						
			江戸川製陶所	東京府小石川区新小川町	陶磁数品 (協賛賞牌一等)	『第二回内国勸業博覧会審査評語 I 第一区第二区』、内国勸業博覧会事務局、1881年
			江戸川製陶所 出品製造人 職工及生徒	東京府	陶磁数品 (有功賞牌三等)	
明治18年	1885	繭絲織物陶漆器共進会	加藤友太郎	東京府	青華小皿・青華角皿 (第四区第一類・五等賞)	『繭絲織物陶漆器共進会審査報告 第四区第一類 陶器』、農務局、工務局、1885年
明治20年	1887	東京府工芸品共進会	加藤友太郎	牛込区新小川町	(一) 珈琲碗 磁器 藍染付 一揃 (第一類)	東京府工芸品共進会編『東京府工芸品共進会出品目録上』、有隣堂、1887年
					(二) 小皿 磁器 一組 (第一類)	
					(一) 花瓶 陶器 唐獅子ノ圖 一對 (第二類)	
					(二) マッチ立 陶器 朝顔模様 二個 (第二類)	
					(一) 蒸發皿 陶器 一個 (第五類)	
					(二) 蒸發皿 陶器 一個 (第五類)	
明治21年	1888	日本美術協会美術展覧会新製品	加藤友太郎	牛込区新小川町二丁目	(三) セル 陶器 一個 (第五類)	『明治二十一年美術展覧会出品目録 新製品第五号』、松井忠兵衛、1888年
					(四) マツプル 陶器 一個 (第五類)	
					(五) 試金皿 陶器 一個 (第五類)	
					青華丸紋平蓋物	
					青華彫紋共蓋水指 一個	
明治22年	1889	日本美術協会美術展覧会新製品	加藤友太郎	牛込区新小川町二丁目	青華梅花紋共蓋水指 一個	『明治二十二年美術展覧会出品目録 新製品第五号』、松井忠兵衛、1889年
					青華古代紋螭耳花瓶 一對	
					青華奈良茶碗 二個	
					青華睡布袋香合 二個	
					青華煎茶碗 五個	
					青磁獸耳花瓶 一個	
明治23年	1890	第三回内国勸業博覧会	加藤友太郎 号友玉園陶寿	牛込区新小川町二丁目	青華磁屹立形 水指柴垣ニ草花模様 一個	『第三回内国勸業博覧会出品目録 追加 第二部 美術 第四類』、1890年
					青華磁腰細水指 枯木ニ蒿模様 一個	
					青華磁福寿小蓋物 二個	
					青華磁茶碗 松画 五個	
明治24年	1891	日本美術協会美術展覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町二丁目	磁器花瓶 (一) (第二部)	『第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録』、内国勸業博覧会事務局、1890年
					磁器花瓶 (二) (第二部)	
明治24年	1891	日本美術協会美術展覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町二丁目	磁器水指 (三) (第二部)	『明治二十四年美術展覧会出品目録 第四』、松井忠兵衛、1891年
					磁器水指 (四) (第二部)	
					磁器花瓶 (五) (第二部)	
					青華花瓶、青華蓋物 (第一部工業・二等進歩賞)	
					菊水紋花瓶 (第二部美術・二等妙技賞)	
					柿釉疎竹彫絵向附皿 五個	
					鍋島焼模青華高山鳴鹿図皿 課題不二 一個	
					鍋島焼青華海藻紋青海波彫皿 一個	
					鍋島焼青華菊水図皿 一個	
					青華紅暈富士翔鶴図皿 一個	
青華紅暈白土雜嵌群蝶図花瓶 一個						
藤紫暈小花瓶 一個						
彩釉茄子酒注 一個						
薄磁白嵌月梅図水呑 二個						
青華羽箒小鼠鎮紙 一個						

和暦	西暦	博覧会名	出品者名義	出品者住所	出品作品名（その他に出品番号、個数、出品区分、受賞、売価、分業製作の際の担当などを記載）※1	出典	
明治25年	1892	日本美術協会 美術展覧会	加藤友太郎		磁製高蒲抜絵花瓶 一個	『明治二十五年美術展覧会出品目録 第三号』、 松井忠兵衛、1892年	
					磁製赤龍紋花瓶 一對		
					磁製月郭公模様花瓶 一對		
					磁製籬朝顔蓋物 一個		
明治26年	1893	日本美術協会 春季美術展覧会	加藤友太郎		磁製竹画花瓶 一個	『明治二十六年春季美術展覧会出品目録 第二』、森戸鈿太郎、1893年	
					磁製芙蓉画花瓶 一個		
					窯変褐色小花瓶 一個		
					磁製鶏画花瓶 一個		
		シカゴ・コロンブス万国博覧会	Kato Tomotaro.	東京府	82. Vase-landscape. (WORKS OF DECORATIVE ARTのうちPottery, Porcelain, etcの部)	『Official Catalogue, Part X, Department K, Fine Arts, W.B.Conkey Company, 1893年』	
					Kato, Tomotaro.	128. A landscape on a vase.	『Revised Catalogue, Department of Fine Arts: with Index of Exhibitions, W.B.Conkey Company, 1893年』
					加藤友太郎	第91部出品 磁器	『官報』第3232号、1894年4月12日
					加藤友太郎	磁製鯉魚図花瓶（名譽賞）	『角川日本陶磁大辞典』、2002年
明治27年	1894	日本美術協会 春季美術展覧会	加藤友太郎		磁製籠月椿画花瓶 一個	『明治二十七年春季美術展覧会出品目録 下』、 志村政則、1894年	
					磁製波龍紋花瓶 一個		
					磁製淡黄釉梅花瓶 一個		
					磁製桜花瓶 一個		
					磁製淡紅釉銀杏香爐 一個		
明治28年	1895	第四回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町二丁目	花瓶（第一部第十類）	『第四回内国勲業博覧会出品目録一 第一部工業』、第四回内国勲業博覧会事務局、1895年	
					花瓶（二）（第一部第十類）		
					花瓶（三）（第一部第十類）		
					花瓶（四）（第一部第十類）		
					花瓶（五）（第一部第十類）		
					花瓶（六）（第一部第十類）		
					花瓶（七）（第一部第十類）		
					花瓶（八）（第一部第十類）		
					花瓶（九）（第一部第十類）		
					花瓶（一〇）（第一部第十類）		
					花瓶（一一）（第一部第十類）		
					花瓶（一二）（第一部第十類）		
					煎茶器（一三）（第一部第十類）		
					皿（一四）（第一部第十類）		
					蓋物（一五）（第一部第十類）		
					蓋物（一六）（第一部第十類）		
					食器（一七）（第一部第十類）		
					置物（一八）（第一部第十類）		
					置物（一九）（第一部第十類）		
					埴塙（第一部第十四類）		
					埴塙（二）（第一部第十四類）		
					磁器埴塙（三）（第一部第十四類）		
					陶器花瓶（山水）（第二部第二十一類）		
					陶器花瓶（水辺千鳥）（二）（第二部第二十一類）		
					陶器花瓶（紅暈波上ノ千鳥）（三）（第二部第二十一類）		
					陶器花瓶（波上群鳥）（四）（第二部第二十一類）		
					花瓶（陶器家鴨図入）50円		中島甲之助編『第四回内国勲業博覧会美術館出品目録』、村上勘兵衛・田中治兵衛、1895年
花瓶（陶器江上明月図入）20円（宮内省御用品）							
花瓶（陶器山家暁雅）50円							
花瓶（陶器浪千鳥）8円							
花瓶（陶器山水模様）50円							
花瓶（陶器浪千鳥模様）8円	『第四回内国勲業博覧会授賞人名録』、第四回内国勲業博覧会事務局、1895年						
磁製月夜山水花瓶、磁製浪千鳥花瓶（第二部美術・妙技三等賞）							
蒸発皿、埴塙（第一部工業・有功三等賞）							
花瓶、日本食器（第一部工業・有功三等賞）	『明治二十九年春季美術展覧会出品目録 下』、 志村政則、1896年						
磁製筒形茄子画花瓶							
磁製月夜雪景画花瓶							
磁製茶地小花瓶							
明治30年	1897	日本美術協会 春季美術展覧会	加藤友太郎		磁製秋夜牧童図花瓶	『明治三十年春季美術展覧会出品目録 上』、 志村政則、1897年	
					青華茄子画花瓶 一個		
					青華鳩画花瓶		
					青華波千鳥花瓶 一個		
					青華朝顔小花瓶 一個		
黄地白梅小花瓶 一個							
					青華竹小花瓶 一個		

和暦	西暦	博覧会名	出品者名義	出品者住所	出品作品名（その他に出品番号、個数、出品区分、受賞、売価、分業製作の際の担当などを記載）※1	出典
明治30年	1897	東京彫工会第12回競技会	加藤友太郎	東京府	黄量青華千鳥圖花瓶 一個 青華象嵌青海波上蝶花瓶 一個（一等褒状） 青華彫刻壽牛花瓶 一個（宮内省御用品）	『東京彫工会報告』第10号、東京彫工会事務所、1898年
明治31年	1898	日本美術協会春季美術展覧会	加藤友太郎		磁製鯉魚図花瓶（三等賞銅牌） 青華茄子図鉢（三等賞銅牌） 磁製青華萬年報寿花瓶	『日本美術協会報告』第1次125号、1898年
明治32年	1899	日本美術協会春季美術展覧会	加藤友太郎		磁製青華水葵之図花瓶 一個	『明治三十二年春季美術展覧会出品目録 全』、志村政則、1899年
					本焼黄釉青華新茄之図花瓶 一個	
					濃茶釉墨陀之図花瓶 一個	
東京彫工会第14回競技会	加藤友太郎	東京府	磁製菊花図花瓶 一個	『東京彫工会報告』第12号、東京彫工会事務所、1900年		
			磁製菖蒲図花瓶 一個（銅牌擬賞）			
			磁製老松鶴図香爐 一個			
一府九県聯合共進会	加藤友太郎		青華花瓶（二等賞）	『一府九県聯合共進会報告』、東京府、1900年		
明治33年	1900	日本美術協会春季美術展覧会	加藤友太郎		陶器波旭図花瓶 一個	『明治三十三年春季美術展覧会出品目録 全』、志村政則、1900年
					陶器墨画森塔図花瓶 一個	
					陶器老松栖鶴図彫香爐 一個	
					陶器墨画山水図花瓶 一個	
					陶器菖蒲花彫青華水指 一個	
					陶器青華鴛鴦図花瓶 一個	
パリ万国博覧会	加藤友太郎	東京	花瓶、香炉	『千九百年巴里万国博覧会出品連合協会報告』、同出品連合協会残務取扱所刊、1903年		
			百合図花瓶	『美術画報 第二 臨時増刊 巴里博覧会出品組合製作品』、画報社刊、1900年		
			磁器花瓶其他（銀牌）	『官報』第5638号、1902年4月24日		
東京彫工会第15回競技会	加藤友太郎		山水図花瓶	『美術画報 第二 臨時増刊 巴里博覧会出品組合製作品』、画報社刊、1900年		
			鶏図花瓶			
			山水図細口花瓶			
東京彫工会第15回競技会	加藤友太郎		河骨図花瓶	『角川日本陶磁大辞典』、2002年		
			磁製老松双鶴図花瓶（名誉大賞）			
第1回全国窯業品共進会	加藤友太郎		青華葉蘭猫児花瓶（金賞牌、宮内省御用品）	北原濤三郎『東京彫工会第十五回競技会受賞品図録』、画報社、1900年		
			磁製青海波金魚花瓶（銀賞牌、宮内省御用品）			
日本美術協会美術展覧会	加藤友太郎		彫刻青華玉蜀黍圖花瓶（宮内省御用品）	『第一回全国窯業品共進会報告』、大日本窯業協会、1902年		
			陶寿紅旭日青華波絵花瓶（皇后宮職御用品）			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	薄茶釉墨画山水花瓶	『明治三十四年美術展覧会出品陳列目録 新製品ノ部』、志村政則、1901年		
			窯変金結晶釉一輪生			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	彫刻月下白梅図花瓶	『日本美術協会報告』第1次163号、1902年		
			洋犬置物			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	磁製貴釉染付龍花瓶	『明治三十四年美術展覧会出品陳列目録 新製品ノ部』、志村政則、1901年		
			青華■樹緋鸚哥画花瓶			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	磁製旭日老松図花瓶（一等賞金牌・宮内省御用品）	『日本美術協会報告』第1次164号、1903年		
			磁製金結晶釉花瓶（宮内省御用品）			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	磁製浪千鳥香爐（協賛褒状一等）	『日本美術協会報告』第1次165号、1903年		
			磁製柳挿画花瓶（協賛褒状二等）			
日本美術協会第32回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎	東京府	磁製青海波螭龍模様花瓶（日本美術協会より行幸の節、明治天皇へ献上）	『明治三十五年 第卅二回美術展覧会出品陳列目録 新製品ノ部』、志村政則、1902年		
			青磁菖蒲額			
日本美術協会第33回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎		磁製菖蒲花瓶	『明治三十六年 第三十三回美術展覧会出品目録 全』、志村政則、1903年		
			磁製柿図花瓶			
日本美術協会第33回美術展覧会 新製品ノ部	加藤友太郎		磁製墨画山水花瓶	『第五回内国勲業博覧会出品目録 第十部 美術及美術工芸』、1903年		
			磁製墨画向鳴花瓶			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町二ノ八	磁製龍図花瓶	『第五回内国勲業博覧会 東京出品連合会報告』、東京出品連合会、1903年		
			磁製薺花瓶			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町	老松双鶴図花瓶	小倉政次郎編『第五回内国勲業博覧会受賞人名録』、東浪館書房、1903年		
			磁製菊花図一輪生			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町	淡紫暈本窯磁菊絵小花瓶（宮内省御用品）	『第五回内国勲業博覧会 東京出品連合会報告』、東京出品連合会、1903年		
			紫雛菊模様香爐（東宮職御用品）			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町	菊模様香爐（東宮職御用品）	『第五回内国勲業博覧会 東京出品連合会報告』、東京出品連合会、1903年		
			蒸菴皿（第九部・三等賞）			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町	青華磁象嵌老松双鶴花瓶（第五部・三等賞）	『第五回内国勲業博覧会受賞人名録』、東浪館書房、1903年		
			淡紫暈磁菊花図小花瓶（第五部・三等賞）			
第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	牛込区新小川町	坩堝（褒状）	『第五回内国勲業博覧会受賞人名録』、東浪館書房、1903年		

和暦	西暦	博覧会名	出品者名義	出品者住所	出品作品名（その他に出品番号、個数、出品区分、受賞、売価、分業製作の際の担当などを記載）※1	出典
明治37年	1904	セントルイス万国博覧会	加藤友太郎	東京	不詳（第四十五部窯業・最高賞受賞）	『官報』第6422号、1904年11月25日
			加藤友太郎	東京府	磁製獅子牡丹図花瓶（二等賞銀牌・宮内省御用品）	『日本美術協会報告』第1次174号、1904年
明治38年	1905	日本美術協会第37回美術展覧会	加藤友太郎		磁窯変牡丹彫花瓶	『明治三十八年 第三十七回美術展覧会出品目録』、志村政則、1905年
					磁かゆう花瓶	
			飯塚千之助（加藤陶壽作）		磁靑龍彫花瓶	
					磁靑海波松千鳥花瓶	
飯塚千之助（加藤菊壽作）		磁鯉花瓶				
		磁紅地木蓮小花瓶				
		磁桐花式花生				
明治39年	1906	日本美術協会第39回美術展覧会	加藤友太郎	東京府	靑華蟠桃花瓶（技藝銀賞牌）	『日本美術協会報告』第1次188号、1906年
					刻磁彩菊紋花瓶（技藝銅賞牌）	
			窯変金結晶花瓶（技藝褒状一等）			
三宅清（加藤友太郎作）	東京府	彩磁琳花式向付（技藝褒状一等）				
明治40年	1907	東京勸業博覧会	江澤金五郎（加藤友太郎作）		靑華紅袖竹外雙鶏図花瓶（一等賞）	『東京勸業博覧会審査報告 巻一』、東京府庁、1908年
			加藤友太郎		理化学用蒸発皿外一点（第一部第十類）	高木栄吉、清宮秀之助編『東京勸業博覧会実記』、重宝新聞社、1907年
			加藤友太郎	牛込区新小川町2ノ8	陶製埴塙外三点（第十四部百三十一類）	
明治42年	1909	日本美術協会第44回美術展覧会	加藤友太郎	東京府	磁窯変玉垂袖花瓶	『日本美術協会報告』第1次208号、1910年
					靑華山水大花瓶（技藝銅賞牌）	『日本美術協会報告』第1次209号、1901年
					白磁彫刻獅子牡丹紋花瓶（技藝銅賞牌）	
明治43年	1910	日英博覧会	加藤友太郎	東京	磁器遊鯉図花盛鉢（銀賞）	『日英博覧会新美術出品図録』、日英博覧会事務局編、1910年
			加藤友太郎	東京	花瓶茶具其他（名誉大賞）	『日英博覧会授賞人名録』、日英博覧会事務局編、1910年
		第二回東京美術及美術工芸展覧会	加藤友太郎		磁製花瓶（二等賞銀牌）	日本美術年鑑編纂部編『日本美術年鑑 第1巻（明治43年度）』、画報社、1911年
明治44年	1911	ローマ・トリノ万国博覧会	加藤友太郎		不詳（グランプリ受賞）	『角川日本陶磁大辞典』、2002年
					靑華飛龍紋花瓶（技藝銅賞牌）	『美術之日本』3巻2号、1911年
					靑華磁近江八景図花瓶（二等賞銀牌）	『美術之日本』3巻11号、1911年
					靑華花瓶（金賞）	日本美術年鑑編纂部編『日本美術年鑑 第2巻（明治44年度）』、画報社、1912年
大正元年	1912	日本美術協会第49回美術展覧会	加藤友太郎		白磁香爐（皇后宮職御用品）	『美術之日本』4巻12号、1912年
大正2年	1913	日本美術協会第51回美術展覧会	加藤友太郎		陶寿紅緋音呼図花瓶（二等賞銀牌）	『美術之日本』5巻12号、1913年
					靑磁雲龍透彫花瓶（宮内省御用品）	『画断』創刊第3年第25号、1913年
大正3年	1914	東京大正博覧会	加藤友太郎	東京府荏原郡大崎町361	花瓶 香炉 置物	古林亀治郎編『東京大正博覧会出品之精華』、時事通信社、1914年
			加藤友太郎		靑磁耳付花瓶（宮内省御用品）	『美術之日本』6巻12号、1914年
			加藤友太郎		陶寿紅御所柿香盒（皇后宮職御用品）	
大正5年	1916	日本美術協会第54回美術展覧会	加藤友玉園（二代陶壽）※2		靑華磁龍彫花瓶（二等賞銀牌）	『美術之日本』8巻5号、1916年
大正11年	1922	日本美術協会故役員遺品展覧会	天賞堂（加藤友太郎作）※3		磁製一家同慶図花瓶	『日本美術協会報告 第11輯』、1923年
昭和3年	1928	日本美術協会創立50年記念故役員遺品展覧会	福井千尋（加藤陶壽作）※4		昭憲皇太后御指痕花瓶	『創立五十年記念 故役員遺品展覧会出陳目録』、1928年
					靑海波龍図花瓶	
					新磁器朱竹図一輪差花瓶	

※1 出品作品名は出典により異なる場合があり、本資料では作品の技法や図様をより詳しく記載しているものについては、重複する可能性があっても採録している。

※2 友太郎（初代陶壽）ではなく、二代陶壽が出品。初代の作品かどうかは不明。

※3 友太郎没後、故人の作品として出品

※4 ※3に同じ

資料3 公文書から判明した宮内省による加藤友太郎の作品購入歴

購入年	西暦	買上となった博覧会名等 または購入名目	納入者名	購入作品名	個数	金額	出典とした公文書 ※1
明治18年	1885	繭絲織物陶漆器共進会	加藤友太郎	染付煎茶碗	10個	1 円50銭	「御用度録 購入5 / 明治18年」 (識別番号69268)
				桜画高脚菓子器	1 対	80銭	
明治28年	1895	第4回内国勲業博覧会	加藤友太郎	陶製月夜山水花瓶	1 個	20円	「御用度録 宮廷費什具2 / 明治28年」(識別番号69357)
明治29年	1896	日本美術協会春季美術展覧会	加藤友太郎	磁製月夜雪景花瓶	1 個	12円	「臨時買上録明治14・29～30年」 (識別番号1070)
明治30年	1897	東京彫工会第12回彫刻競技会	加藤友太郎	磁製牽牛花花瓶	1 個	25円	「御用度録 宮廷費什具2 / 明治30年」(識別番号69370)
明治31年	1898	日本美術協会春季美術展覧会	春季美術展覧会理事 綾瀬和三次	磁製青華万年報寿花瓶	1 個	100円	「御用度録 宮廷費什具2 / 明治31年」(識別番号69370)
明治32年	1899	東京彫工会第14回彫刻競技会	加藤友太郎	磁製彫鶏ノ図花瓶	1 個	200円	「臨時買上録明治31～35年」(識別番号1071)
明治33年	1900	東京彫工会第15回彫刻競技会	加藤友太郎	陶製金魚図彫刻花瓶	—	130円	
				陶製猫児青華蘭彫刻象眼花瓶	—	280円	
明治35年	1902	日本美術協会美術展覧会	日本美術協会理事 小森澤長政	磁製旭日老松図花瓶	1 個	360円	「御用度録 宮廷費什具3 / 明治35年」(識別番号69388)
明治36年	1903	第5回内国勲業博覧会	加藤友太郎	沈紫暈本窯磁菊絵花瓶	1 個	55円	「御用度録 臨時御買上品ノ部 (宮廷) / 明治36年」(識別番号69395)
明治37年	1904	日本美術協会美術展覧会	加藤友太郎	磁製牡丹獅子図花瓶	—	100円	「御用度録 宮廷費文房具書籍 ノ部 / 明治37年」(識別番号69397)
明治39年	1906	名古屋離宮、静岡御用邸装設品	加藤友太郎	磁製花瓶：陶壽紅白象眼彫刻双鶏之図	1 個	280円	「御用度録7 明治39年」(識別番号21951-2)
明治40年	1907	東京勲業博覧会	加藤友太郎	磁器花瓶：松二鯉	1 個	460円	「御用度録 臨時御買上品ノ部 / 明治40年」(識別番号69420)
		氷川町御用邸装設品	加藤友太郎	青華播桃図花瓶	1 個	150円	「御用度録6 明治40年」(識別番号21952-1)
明治43年	1910	東京美術及美術工芸展覧会	加藤友太郎	磁製獅子牡丹模様花瓶	—	300円	「臨時買上録明治42～43年」(識別番号1072)
明治44年	1911	第2回全国勲業品共進会	加藤友太郎	花瓶染付山水	1 個	200円	「臨時買上録明治44～45年」(識別番号1073)
明治45年	1912	第2回東京勲業展覧会 ※2	加藤友太郎	太白磁彫刻龍ノ図花瓶	1 対	50円	
大正2年	1913	日本美術協会第51回展覧会	加藤友太郎	青磁雲龍透彫花生	1 個	160円	「御用度録 (宮廷) 8 / 大正2年」 (識別番号69455)
		東京彫工会 ※3	飯塚仙之助	磁製雲龍彫刻花瓶 (新調)	1 個	150円	
大正4年	1915	武庫離宮備付品	加藤友太郎	青華竹林山水図花瓶	1 個	120円	「御用度録16大正4年」(識別番号21959-4)

※1 出典とした公文書はすべて宮内公文書館所蔵。

※2 第2回東京勲業博覧会は開催されておらず、明治45年(1912)4月に開催予定だったが財政困難のため中止になった日本大博覧会のことか。

※3 展覧会ではなく東京彫工会を通じて新調を依頼したもの。納入者の飯塚仙之助は、友太郎の妻直子の実弟・飯塚千之助と同一人物か。

本紀要の投稿原稿は、編集委員会において査読を経た審査をし、採用決定したものを掲載しています。掲載内容は、収藏品および館の業務に関わるものを題材とし、関連諸学（美学・美術史学、歴史学、考古学、博物館学、博物館教育、博物館情報、保存科学等）における研究、および上記以外の館の活動に関わる事業・事例等報告とします。

このうち、事業・事例等報告や調査概報については、査読はないものとします。

#### 編集委員会

##### 委員長

建石 徹  
戸田 浩之  
瀬谷 愛  
五味 聖  
高梨 真行

- 『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』中、作品名や作者、制作年などの表記は、紀要発行当時のものです。

- 『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』の著作権は独立行政法人国立文化財機構皇居三の丸尚蔵館に属し、本ファイルを改変、再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

- 『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』に掲載された文章や図版を利用する場合は、出典を明記してください。また、図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は、当館ホームページ記載の手続きを行ってください。

## 尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要

第二号（通号三十一号）

二〇二五（令和七）年度

#### 編集・発行

独立行政法人国立文化財機構

皇居三の丸尚蔵館

東京都千代田区千代田一―八

#### 制作

株式会社アイワード

北海道札幌市中央区北三条東五―五―九一

#### 翻訳

株式会社 Doshin EC

二〇二六年三月三〇日発行